

オーストラリアにおけるリタイアメント・ ヴィレッジに関する一研究

宮 原 英 種

定年後の生き方の模索

1998年9月、NHKスペシャルで「定年後・どこでだれと暮らしますか」という高齢社会を迎えての定年後の生き方についての番組が放映された。国会図書館を定年退職した67歳の夫婦と、民間会社の部長職を最後に職を辞した63歳の夫婦を中心に定年後の生き方を模索した番組である。

現在日本においては、毎年32万人のサラリーマンが定年退職し、150万の人が60歳の年齢を迎えている。日本人の平均寿命、80歳、定年後の自由時間は、10万時間に及ぶ。その時間をどのように使うかの模索が始まっている。定年後の生き方はさまざまである。しかし、その放送が伝えるところによると、定年退職後の夫婦のうち、2組のうちの1組の夫婦が、それまでの地縁、血縁のきずなを絶って、新しい土地で新しい生き方を求めている。とくに、東京をはじめとする大都市でそれまで仕事一途に打ち込んできたビジネスマンにその傾向は強い。この番組においても、東京都区内の高速道路の近くに居をもっていた67歳の夫婦は、新鮮な空気と静かな環境を求め、静岡県のある田舎を「終の住家」として移住することになる。その家は、58歳になるその土地の資産家の高校教師が自分の土地を解放し、定年退職後の人たちの共同住宅を入居者の資金で建設し、将来ともに助け合いながら、来るべき高齢化時代を生き抜こうというものである。

高齢者が共同で新しい生活をはじめ、もしそのなかのだれかに介護が必要に

なったときは、そこに住む者が手を差し伸べ、助け合いながら生きていこうというものである。その理想のもとに、共同生活への第一歩はスタートしたのである。しかし、理想が具体化するにつれて、その村づくりの発案者の高校教師夫妻に、将来に起こるであろう一つの大きな不安が頭をもたげてくる。それは、かれが理想とする高齢者たちの共同生活において本当に相互扶助の介護ができるのか、ということへの不安である。高齢化は、その共同住宅で共同生活を営んでいるすべての者に等しくあらわれる。いま60歳の者は、10年後は70歳、20年後は80歳である。そのころになると、超高齢者だけが生活するという事態にもなりかねない。そんなとき、だれがこれらの人たちを介護するのか、という問題が必然的に起こってくる。この番組は、67歳の夫妻の田舎への新しい旅立ちと、高校教師夫妻のその村への将来の不安を交えながら終わっている。

いま日本は、急激なカタチで高齢社会を迎えている。国連の定義によれば、「高齢化社会」とは、65歳以上の人たちが全人口の7%を越えたときである。その割合が14%を越えると、「化」がとれて「高齢社会」となる。

1970年に7%であったわが国の高齢者人口は、年々その比率を高め、1990年には、12.1%となり、最近の発表では、65歳以上の人口は2,000万人を突破し、その比率も16.2%となり、まさしく、国連でいう「高齢社会」になったのである。さらに、2025年には、全人口の25%、すなわち、4人に1人が65歳以上の高齢者になることが推定されている。さらに、2050年には、3人に1人が高齢者となるのである。

筆者は、これからの「高齢社会」の新しい時代をあらわすことばとして、人間の一生を区分するものとして「齢代」という呼称と概念とを提唱している(1997 a, 1997 b)。

「第一齢代」とは、人間が生まれてから成長するまでの時期である。これまでの心理学の発達区分でいえば、乳児期から青年期に至るまでの時期が「第一齢代」である。この時期は、この世に生まれた人間がその社会において生きていくための資質や能力を獲得する、端的に言えば、学習の時期であるといつてよいであろう。その意味で、第一齢代としての乳児期から青年期に至る時期は、

人間が直面する問題や課題、生活の内容、生き方は、来るべき次の齢代とは明確に異なるものである。

「第二齢代」は、仕事に就き、結婚し、家庭をもち、子どもを育て、家計を支え、定年を迎えるまでの時期である。おそらく、一生のうちで、もっとも責任をとまなう、成熟した年代である。

しかし、人間の平均寿命の伸びとともに、そのあとの人生の終期である「第四齢代」を迎えるまでに膨大な時間が残されることになった。それまでの社会的責任から解放されたあとの20年、あるいは、30年に及ぶ時間をどう生きるかが重要な問題となってきたのである。介護と依存の「第四齢代」を迎えるまでのその長い時間が「第三齢代」といわれるものである。したがって、「齢代」という概念は、長寿社会を迎えたいま、「第三齢代」の概念を中核として生まれたものであると考えてよい。いまからおよそ70年前の大正の時代には、定年後の夫婦だけの生活が7年であったものが、現在では、20年近いものとなったのである。その期間は、平均寿命の伸びとともに、さらに長くなると推定される。そこには、これまでとは違った、定年後の、いわゆる「第三齢代」の長い時代をどう能動的に、積極的に、たのしく生きるかの「生き方」が求められるのである。NHKスペシャルで描かれている人たちの定年後の生き方の模索と、その人たちの将来への決断と迷いは、「第三齢代」を生きる人たちのすべての人たちにいえるものである。

リタイアメント・ヴィレッジ

67歳の夫妻が長年住みなれたわが家の門を閉じ、新しい移住地へと旅立つ姿で終わっているNHKスペシャルの最後のシーンは、希望に満ちた新しい人生への旅立ちというよりも、なにか物悲しい。それは、それからはじまる共同生活の未来が見えてこないからである。もし同世代の人たちが共同生活を続けていくなかで、一人、二人とからだが不自由になったとき、その人たちを本当にとともに助け合い、支え合いながら、生きていくことができるのか、というこ

とへの解答が見えてこないからである。それは、「第三齡代」を生きる人たちがその齡代を生きるためには、個々の力量と努力によって生きていかなければならない現状があるからである。わが国においては、第三齡代を生きるための社会的なシステムが存在していないのである。

ところが、海の向こうのオーストラリアには、退職者がそのあとの人生をいきいきとたのしく、安心して生きていくことができる社会的なシステムが存在する。リタイアメント・ヴィレッジ (retirement village) である。おそらく、これに似たシステムは、日本にはまだ存在していない。最近、福岡から自動車でおよそ1時間の距離に日本ではじめてと銘打ったタウンができたが、それが完全に完成するまでには、なお多くの歳月が必要であろう。日本の退職者は、その職を離れたその瞬間から、一人で、あるいは、一人の力で生きていかなければならないのである。いってみれば、日本においては、退職者を受け入れる社会的な受け皿がないのである。

オーストラリアのリタイアメント・ヴィレッジは、夫婦のどちらかが55歳以上の人であれば、入居できる。「退職者の村」といっても、なにも仕事を退職した人たちだけがその資格があるというものではない。いま職にある人でも、その年齢に達していれば、入居できる。もちろん、夫婦だけではなく、単身者もその資格は平等である。

そのリタイアメント・ヴィレッジの第一の特徴は、退職者のアクティビティやケアに経験をもつ会社がビジネスとしておこなっているということである。したがって、そのノウハウは、長年の経験によって裏づけられている。

第二に、ビジネスとしておこなうには、そのビジネスを成功させなければならない。ヴィレッジ内の施設の建設費、膨大な敷地や建物の維持管理、ケアのための人件費、これらがビジネスとして採算ベースにのるようになければならない。おそらく、それを解決する主要な方法が、不動産売買であろうと思われる。いいかえれば、不動産売買と結びついたビジネスであるということである。日本においても、かなりの高額ながら、高齢者用のマンションを購入した人は、一定の管理費のもとに、生活ができるシステムがつくられている。しか

し、こういったシステムも、すべてが、必ずしもうまくいっていないところもあるようである。テレビや新聞紙上でそういったことがとりあげられることがある。病弱になり、寝たきりになっても、最後まで面倒をみるとうたいながら、いろいろな理由をつけて、それをしないために起こるトラブルである。それは、元気で活動的な「第三齢代」から、依存と介護の「第四齢代」へ移行するときにかかる問題である。NHKスペシャルの最後の映像に新しい人生への明るい旅立ちとして映らないのは、いわゆる、「第三齢代」から「第四齢代」への移行と、「第四齢代」の生活がみえてこないからである。

しかし、オーストラリアのリタイアメント・ヴィレッジは、その問題を三つのステージで解決しようとしている。日本にも、高齢社会の進展にともなって、老人保健施設、特別養護老人ホームといった施設が全国的な規模で展開されている。しかし、そういった日本のケア・システムと決定的に違うのは、同じ敷地のヴィレッジ内に、一つのシステムとして、三つ、あるいは、四つのステージがつくられ、能動的な身体的、精神的活動の能力に応じて、そのステージを移動し、もし必要であれば、百パーセント、すべてのケアを受けることができるナーシング・ホームで暮らすことができるようなシステムになっていることである。

おそらく、筆者のいう第三齢代は、ヴィレッジ内の独立した家屋で生活し、さまざまなアクティビティやツアーに参加し、その生活を十分にエンジョイしながら、もし心身ともに弱り、いわゆる、依存と介護の第四齢代を迎えれば、ナーシング・ホームで完全看護の生活がおくれるというものである。それがシステムとして存在するということである。

しかも、他に個人的な収入もなく年金だけで生活している、いわゆる、純粋な年金生活者に対しては、そのケアや生活に必要な金額で不足があれば、それは政府が面倒をみる、という制度がとりいれられている。すなわち、リタイアメント・ヴィレッジのもう一つの特徴は、それが政府の福祉制度と連結していることである。ナーシング・ホームにはいった場合、政府からの援助は、その人の個人収入の有無や程度、その人のおかれている状況によって、その金額は

異なっている。しかし、いずれにせよ、ある程度個人的な収入があるにしても、それに応じて一定金額の補助が政府から支出されているのである。

インディペンデント・リビング

定年退職した人がリタイアメント・ヴィレッジで最初に生活をはじめるのは、インディペンデント・リビング (independent living) といわれる、独立して、自分たちの力で生活するところである。食事を自分でつくり、洗濯、部屋の掃除など、生活に必要な作業のほとんどは、自分でおこなう。その点、高層のアパートメントや一戸建てで生活するのとはほとんどかわらない。ただ違うのは、部屋には二十四時間の緊急コールが設置され、ヴィレッジ内には昼夜職員が常駐し、緊急事態に対して対応できる体制ができていることである。もう一つは、ヴィレッジ内には、プール、スパ・バス、ボールズ、クリケットなどの野外アクティビティ、さらにはトランプ、ビリヤードなどのさまざまな遊びができるようになっていることである。もちろん、外出も自由だし、自動車に乗れる人は車を運転し、車を運転しない人は、ショッピング、病院、年金の受け取りなどは、ヴィレッジ・バスが定期的に運行されている。管理費は、夫婦でおよそ週60ドル、一か月240から250ドルである。

それでは、リタイアメント・ヴィレッジの値段は、どの程度であろうか。南国風の明るい、ショッピング・センターから少し内陸にはいった、シプレス・ガーデン・リタイアメント・コミュニティも、日本ではみられない、明るく、清潔で、広々としたヴィレッジをつくっている。ここには、そのコミュニティ、ヴィレッジを取り囲む外壁はなく、まさしく、地域社会の一つとしてとけ込んでいる。55歳以上の退職者の生活や生活環境といえ、つい、明るさの消えた、沈みがちな生活環境を連想しがちである。しかし、このシプレス・ガーデン・リタイアメント・コミュニティをはじめ、いずこのリタイアメント・ヴィレッジも、明るい太陽がさんさんと照り、さまざまな熱帯の木々が青々と枝を伸ばし、美しい庭園にはさまざまな花が咲き、日本のいずこをさがしても、得られ

ないような環境をつくりだしている。

このシプレス・ガーデン・リタイアメント・コミュニティの管理棟の前には、樹齢百五十年の大木が天を突き、近くを流れるチャンネルの岸辺には、ヴィレッジでインディペンデント・リビングを営む人のための家々が美しい軒を連ねている。

ウォーター・フロントに面した一寝室の家で、17万6千ドル、二寝室の家で、23万8千ドルである。この二寝室の家は、チャンネルに面して二十畳のリビング・ダイニング、それに続く四畳のスタディ・ルーム、それぞれ八畳と六畳の広さのベッド・ルームと、八畳の広さのキッチン、それに、二つのトイレと、ランドリーのついた落ち着いたカラーコンディションをほどこした家である。このヴィレッジは、クインズランド州でもっともよいと自慢するだけあって、家の値段も結構高い。それだけに、家のつくりや環境は拔群である。

このシプレス・ガーデン・リタイアメント・コミュニティでは、管理棟と廊下でつながれた、しょうしゃな二階建てのサービスド・アパートメントがある。さらに、このコミュニティを入るところに、第三ステージの平屋のナーシング・ホームが真っ青な空のもと、秋のまぶしいばかりの太陽の光をあびている。

サービスド・アパートメント

リタイアメント・ヴィレッジでは、通常、管理棟に近い場所に第二ステージのサービスド・アパートメント (serviced apartment) がつくられている。インディペンデント・リビングで長きにわたって生活したあと、この第二ステージのサービスド・アパートメントに移ってくるわけである。人間は加齢がすすむと、毎日の食事をつくる、掃除や洗濯、風呂の掃除、絨毯に電気掃除機をかける、といったルーチン的な仕事はずらわしくなってくる。しかし、からだはまだ十分に自由がきき、ある程度の遊びもできるといったことである。

こういったサービスド・アパートメントがつくられていった背景には、いくつかの要因があったと考えられる。一つは、「インディペンデント」というこ

とは、永遠に、いつまでも続くものではない、という思想である。家族とともに生活していても、やがては「インディペンデント」から「ディペンデント」へとになっていく。NHKスペシャルで放映された番組で新しい「終の住家」をみつけても、その将来がみえないのは、まさしく、「インディペンデント」から「ディペンデント」への移行と、そのあとの問題である。

オーストラリアにおいてリタイアメント・ヴィレッジが求められるようになったのは、社会における加齢のいった人たちの意識の変化であると考えられる。日本に比べて子どもと一緒によりも、独立した別の生活を営む傾向の強いオーストラリアにおいても、第三齢代にはいった人たちのなかには、家族と一緒にに拡張家族で暮らすより、自分たちで独立して、より静かな生活を、プライバシーのある生活を望む声が強くなったということである。おそらく、こういった意識の変化や将来への展望をもたらしたのは、まさしく、長寿社会であったと思われる。わが国においても、現在、会社を定年退職し、第三齢代にはいった人たちの2人に1人が従来の子どもの同居を求めず、血縁、地縁を越えた新しい生活をのぞむのは、第三齢代といわれるわが国の人たちの間にも、大きな意識革命が起きていることを物語るものである。長寿社会は、そこに住む人間の寿命を伸ばすだけではなく、その人たちの生き方、意識すらも確実に変えているのである。

リタイアメント・ヴィレッジの生活

リタイアメント・ヴィレッジというのは、日本語に強いて訳せば、「退職者の村」ともいうべきものである。しかし、それを「退職者の村」と訳してしまえば、なんとなく、暗い世間から孤立したイメージをいだくが、第二齢代を生き抜いてきた人たちが、退職後の第三齢代の時代を健康で静かに、楽しく生きていくことができるようにつくられたものである。

オーストラリア、ゴールドコーストでは、リタイアメント・ヴィレッジが現在8か所つくられ、クイーンズランド州の州都、ブリスベーンとその北に広が

るサンシャインコーストには、現在26のリタイアメント・ヴィレッジがつけられている。いま、オーストラリア全土でリタイアメント・ヴィレッジで生活している人は、26,000人といわれている。

とくに風光明媚でさまざまなアクティビティのできるゴールドコーストは、一年を通しての温暖な気候とあいまって、オーストラリア各地からリタイアしたあとの人々が、この地にやってくる。現在では、全人口の40パーセント近くが、50歳以上の人で占められている。ゴールドコーストは、若者のサーフィンのメッカや幼い子どもを連れたファミリーの楽しみだけではなく、リタイアしたあとの、いわゆる、「第三齢代」を生きる人たちの生きがいの場となっているのである。

こういった人たちは、ゴールドコーストでさまざまな住み方をする。ビーチぞいの高層アパート、運河の岸辺の戸建て、熱帯雨林の山のなかなど、第三齢代を楽しく生きるために、その住まいをかまえる。

その一つがリタイアメント・ヴィレッジである。リタイアメント・ヴィレッジは、まわりの騒々しい雑音や世間のわずらわしさから離れて、静かに第三齢代を生きていくためにつくられたものである。

ゴールドコーストのロビナ地区の一角にロビナ・リタイアメント・ヴィレッジがある。ロビナは、新しくつくられたロビナ・タウンセンターを中心に新しい住宅が次々につくられ、これからのゴールドコーストの発展の一つの中心地として注目されているところである。その近くには、人口130万のクイーンズランド州の州都、ブリスベンとも鉄道でつながっている。ヴィレッジは、小高い丘の上に建っている。真っ青な空。新鮮な空気。真っ赤なハイビスカスの花が咲く庭園。遙か向こうには、熱帯雨林のヒンターランドの山々がみえる。このヴィレッジは、1990年にはいつてからつくられ、現在およそ89戸のインディペンデント・ハウス、クラブ・ハウスなどが建てられている。

クラブ・ハウスのなかに入ると、二階まで吹き抜けた高い天井。透き通った大きな窓ガラスからは、心地よい光がやさしく差し込んでいる。ガラスの向こうには、青く映えた三十メートルほどのプールが、まるで蛇行して流れるよう

にデザインされている。その横には、スパ・バスもつくられ、高級ホテルのロビーに踏み入れた感覚である。

朝の10時、その豪華なラウンジでテーブルを囲んでのモーニング・ティーの時間である。そこには、「退職者の村」ということばからはほど遠い、豪華で、明るい、青空のような心地よい空気がただよっている。

ロビナ・リタイアメント・ヴィレッジの基本精神は、加齢はかならずしも身体的、精神的衰退を意味しない、ということである。リタイアメント・ヴィレッジでの生活は、新しい環境での、新しい友だち、新しい遊び、新しい興味への人生のはじまりであるという考えである。そのためのサービスがさまざまなところでなされている。

ナーシング・ホーム

第三段階がナーシング・ホーム (nursing home) である。さらに加齢が進み、慢性疾患をもち、24時間の看護を必要とする人たちのためにつくられたのがナーシング・ホームである。リタイアメント・ヴィレッジによっては、サービスド・アパートメントとナーシング・ホームの中間に、ナーシング・ホームの入居者よりもやや軽度の症状をもった人たちを介護するホステル (hostel) を設けているところもある。

オーストラリアにおけるナーシング・ホームの歴史は古い (1993¹⁾)。ナーシング・ホームは、非営利団体、とくに宗教に基づくボランティアによる活動、連邦政府、州政府によっておこなわれている公共部門、さらには、最近では、企業等の営利団体がその一翼をになっている。とくに、企業等の営利団体によっておこなわれているリタイアメント・ヴィレッジには、第一ステージのインディペンデント・リビングと第二ステージのサービスド・アパートメントと併置して同じ敷地内に第三ステージとしてナーシング・ホームが設置されている。

ある私企業がつくったリタイアメント・ヴィレッジには、その入り口にナー

シング・ホームの平屋が建てられている。そこには、軽い痴ほう症を含めておよそ90名の人たちが入居している。それを介護する者の人数も、ほぼ同数である。しかも、そのナーシング・ホームの入居待望者は、ゼロである。このナーシング・ホームに入居するには、その企業の一存ではできない。インディペンデント・リビングからサービسد・アパートメントへの移行は、本人の希望とそのリタイアメント・ヴィレッジを運営している私企業の判断によっておこなうことができるが、ナーシング・ホームへの入居は、州政府の判断にまたなければならぬ。しかし、入居が決定すれば、入居期限についての制約はない。また、たとえば、夫婦でそのリタイアメント・ヴィレッジで生活し、夫婦のどちらかが病になり、ナーシング・ホームに入居したとき、夫婦は別々の生活だとはいえ、たとえば、毎日、健康な夫婦の一人がナーシング・ホームを訪ね、ともに過ごす時間をもつことができるのである。

オーストラリアにおけるナーシング・ホームは、100年以上の歴史をもつといわれる。しかも、おそらく、最初は、その多くが慈善事業の一環として、宗教関係によってはじめられたものであろう。筆者が訪ねたブリスベン郊外のあるヴィレッジも、今からおよそ50年前の1949年、イタリアのローマから来た5人の修道女によってつくられたものであった。広大な敷地のなかにつくられたそのヴィレッジは、病院、ナーシング・ホーム、さらに健康な人たちのための棟でできていた。最近私企業によってつくられている、明るい、さまざまな施設をもったリタイアメント・ヴィレッジとは違って建物は古いながらも、その歴史を感じさせるものである。

このヴィレッジにあるナーシング・ホームの入居者の支払いは、受けるケアの種類、収入・資産の程度などによって異なっている。しかし、1日のケア・フィは、最高21.52オーストラリア・ドルである。1ドル80円のレートとして計算して、およそ、1,650円である。なお、その他、資産に応じて1日あたりの支払いがある。資産、23,000ドル以下であれば、支払いなし。資産が28,000ドルであれば、2.74ドル、37,000ドル、6.00、44,900以上であれば、最高12.00ドルである。しかし、それは、そのヴィレッジを退去のとき、ほとんど

その全額が返還されることになっている。1日20ドル前後であれば、ほとんど年金でまかなえる金額である。

オーストラリアにおいては、さまざまなかたちでの、いわゆる、第三齢代を生きるための施設が社会的なシステムとしてつくられている。その代表的なものの一つが、リタイアメント・ヴィレッジである。そのヴィレッジは、職を退いたあとの第三齢代の人たちが活動ができるさまざまな施設をヴィレッジ内にもち、さらに、同じ敷地にサービスド・アパートメントとナーシング・ホームを共有することによって、第三齢代から第四齢代へと至る時代を不安なく、いきいきと生きていくことができるのである。それが一つの社会的システムとして存在しているのである。

わが国の高齢社会への取り組みは、遅い。わが国の高齢者福祉対策については、いわゆる、第四齢代の依存と介護の問題を中心に、老人保健施設、特別養護老人ホームの全国的な展開や、公的介護保険の導入や介護士の養成、あるいは、その学校の設立などの取り組みがなされている。しかし、それと同時に、いわゆる、第三齢代をどう健康で、いきいきと生き、さらに、不安なく第四齢代へと移行していくのかということも、それに劣らず重要な問題である。それにもかかわらず、それについての視点はほとんど存在しない。

「高齢社会」は「第三齢代」と「第四齢代」から構成されるものである。「高齢社会」「長寿社会」とは、まさしく、第四齢代の依存と介護の問題と同時に、長い第三齢代をどう生きるかの問題なのである。NHKスペシャルで描きだされた二組の夫婦の姿は、これからの20年におよぶ第三齢代をどう生きるかの問題である。しかも、そのあとには、第四齢代がある。この夫婦の前には、第三齢代をどう生きるかということへの決断と同時に、依存と介護の第四齢代へどう移行しその時代を生きるかということへの、見えない世界が広がっているのである。それは、まさしく、定年を迎え、新しい齢代へと足を踏み出したほとんどすべての人たちに等しくいえるものである。

「齢代」という新しい概念のもとに、これからのわが国の高齢社会のあり様を検討し、第三齢代の人たちが不安なく、いきいきと生きていくことのできる

社会を構築していかなければならない。それを示唆する一つの手がかりが、オーストラリアにおけるリタイアメント・ヴィレッジと三つのステージである。

文 献

宮原英種 1997 a オーストラリアにおける第三齢代の自己学習に関する心理学的研究
第一経大論集 第26巻 第3号 31頁-44頁

宮原英種、宮原和子 1997 b 高齢社会を愉しむ ナカニシヤ出版

福永義之助、冷水豊 編著 1993 高齢化対策の国際比較 第一法規